清教学園 創立 75 周年

「実を結び、その実が残るように」

2026 年 11 月

聖書科教諭　安川 美穂

あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだ。あなたがたが出かけて行って実を結び、その実が残るようにと、また、わたしの名によって父に願うものは何でも与えられるようにと、わたしがあなたがたを任命したのである。

（ヨハネによる福音書 15 章 16 節）

実りの秋を迎えました。収穫は、それ自体が大きな喜びです。しかし、その実を結ぶまでに蒔かれた種や、そこに注がれた労苦、そして目には見えない神様の恵みを思うと、喜びはさらに深い感謝へと変わります。

清教学園は今年、創立 75 周年を迎えました。この学園という大きな「実」が結ばれるために、最初に蒔かれた種は、戦後の教会の中学生たちの心に与えられた一つのビジョンでした。

人の願いには様々なものがありますが、「天から与えられる願い」というものが確かに存在します。それは大抵、人の計算や常識からすれば、とても実現できそうもないような願いです。それでも、その願いは人の心に鮮明に描かれ、信仰と喜びと情熱を生み、祈りへと人を導きます。そして神様は、その祈りに応えてくださるのです。時には、誰も想像しなかった方法で道を開き、必要を備え、夢を現実としてくださいます。清教学園の歩みも、まさにそのような神様の御業だったのではないでしょうか。

私自身も中学、高校の 6 年間をこの学園で過ごしました。多くの素晴らしい先生方や友人との出会いに恵まれ、温かな神様の愛を感じながら学園生活を送りました。そして何より感謝しているのは、この学園でイエス・キリストと出会い、その後の人生を導く多くの出会いと、アフリカへとつながる道が与えられたことです。かつては自分とは無関係だと思っていた世界へ、清教学園が私をつないでくれました。

そして、実には一つの大切な性質があります。実の中には「種」があるということです。

実は、実としてそこに留まるためにあるのではありません。そこには次の命につながる種が宿っています。清教学園で学び、成長し、それぞれの場所へ巣立っていった卒業生たちもまた、神様によって蒔かれた種を携え、それぞれの召命や賜物に従って、世界のさまざまな場所で実を結んでいるのでしょう。

つい先日も、フランスの教会でボランティアをしている友人から、「そこで出会った日本人女性が、何と清教学園の卒業生だった」という知らせを受けました。最近はインドネシアからも同じような知らせがありました。いったい、どれほど多くの国々に清教生たちが遣わされているのでしょう。

イエス様は、「出かけて行って実を結び、その実が残るように」と言われました。私たちもまた、誰かが蒔いてくれた種によって今ここにいます。そして、私たちの中にも、次の人へ手渡していく種が宿っています。

75 周年を迎えた今、これまで蒔かれてきた種と、ここまで育ててくださった神様の恵みに感謝するとともに、これから私たちを通して、どこで、どんな実が結ばれていくのかに期待したいと思います。

私たちが結ぶ実が、やがて誰かの人生に新しい種として残り、その人を通して、さらに豊かな実を結んでいきますように。

「実を結び、その実が残るように。」

この御言葉が、75 周年を迎えた清教学園と、ここに集う一人ひとりのこれからを導く言葉となりますように。